広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『青鞜』の時代
Author(s)	ニッキー リットマン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1991 : 139 - 145
Issue Date	1992-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039314
Right	
Relation	

『青鞜』の時代

ニッキー・リットマン

1911年 9月に「元始、女性は太陽であった」という不朽の言葉で青鞜社は短くても重要な生涯を始めた。『青鞜』は思いがけない時に日本女性の意識の歴史に転換期をもたらした。『青鞜』の創立者であった平塚らいてう（明子）はこの後も近代日本の女性史で重要な役割を演ずるようになった。すなわち1971の死去までの生涯を女性解放、平和と民主主義という問題の闘争にささげた。

明治時代の女性

女性の目ざめを高らかに宣言した雑誌『青鞜』は明治時代の暮れに創刊された。この当時は弾圧的な政府によって女性のふくらんでいる期待と夢がくじかれたのである。明治時代の初期に教育と政治の世界に女性の位置は大きく進歩した。教育という分野で女子学校の数が増加して例えば1872年に東京で最初の国立女子学校が創立されて1900年に津田梅子の英学塾が女性の高等教育のために開かれた。1901年にらいてうの通っていた日本女子大学が成瀬仁蔵によって創立された。政治活動の分野では1872年に岸田俊子という自由党に名声をあげた女性の政治的権利欲求を公表して全国の女性に影響を与えた。福田英子という人も自由民権運動の活動家として婦人の政治上の自由の獲得のためにいろいろな運動をした。この人は社会主義の見方を持って1885年に大阪事件に連座した。

この当時の女性は初めて家長制度社会に反抗して東京婦人強風会などの婦人会に参加している女性は多くなった。女性が働いている職場での女性教育上の進歩や売春とめかけ囲いの風習を終わらせる運動を行った。封建的家族制度に反抗している女性が多くなるにつれて政府が弾圧を厳しくして女性を良妻賢母という古風な役割に回復しようとした。1890年に治安警察法第五条によって女性の政治参加を全面禁止した。1890年から1922年まで政治的過程が女性を切り離した。どの女の人でも政治集会に参加してみても組織してみても拘禁されることになった。この当時の政府の女性に対して観念形態によって理想的な女性というのは良妻賢母主義に従っていたのである。女性は家にある役割を守らなければならずこれは江戸時代と同じような封建制度の思想として見られている。

こういう冬の時代という抑圧的政治状況で『青鞜』が生まれた。誕生日は明治44年にある26人が明治天皇の暗殺を図るという罪を犯して死刑を受けたという大逆事件のすぐ後だった。

平塚らいてう

『青鞜』と大正時代の新しい女の代表者になった人は平塚らいてうなのだ。平塚明子は1886年2 月10日に生まれた。父親が官吏で東京で豊かなに育った。明子はお茶の水高等女学校に通うい明治36年に卒業後学校教育が終わるはずであったが、母親の光沢（つや）のおかげで『（入りたかった）英文科ではいけないが家政科ならば。』という父の条件つきで明子は成瀬の創立したばかりの日本女子大入学を許された。女子大では家政科の授業には余り出なくて外国文学を読んだり禅宗に熱中して来たりして時間を過ごし自分の思想に大きな影響を及ぼした。『青鞜』に乗り出した時の大事な有力者と付き合う機会が大学生時代であった。女子大で進歩主義教育を期待するよりむしろ学校の保守的立場に裏切られ、受けた教育に満足しなかった。1906年に卒業後自分の知識を増進するため勉強をこっそりし続けた。お寺で禅を修業したり津田梅子の英学塾で英語を勉強したり生田長江が指導した「閨秀文学会」の会員になったりした。生田長江という作家とドイツの哲学の学者が女性文学活動をよく支持して実際に『青鞜』の創刊を起こした人だそうである。らいてうの人生の転換期がこの閨秀文学会だと言われている。日本の文壇知名婦人作家と初めて出会った時だ。有名な明治詩人でこの後『青鞜』の賛助員になった与謝野晶子はその一例である。その上にらいてうは「煤煙事件」といわれた心中未遂スキャンダルの相手の森田草平との不吉な出会いがこの閨秀文学会においてのである。こういうスキャンダルがマスコミで広く広告されてらいてうは世の嘲笑を浴びた。スキャンダルの余波として生田先生はらいてうに「女流文芸雑誌の創刊はどうか」と勧めた。最初に自分の将来が文学にあるかどうかわからずらいてうは生田先生の提案をまじめに考えなかったが、友人と『青鞜』の共同の発起人になった保持研子（やすもちよしこ）の雑誌企画の熱意をみて心が動き、最初の女性ばかりの手で作る婦人雑誌を刊行する決心をした。この当時までに婦人むけの雑誌はかなり多くなったが ― 特に福田英子によって、1907－1909年に出版された社会主義的な女性の生活意識の向上を図った「世界婦人」という雑誌 ― 女だけによる女むけの文芸同人誌は始めてだ。結局生田先生と母と友人との支持で平塚らいてうは『青鞜』の責任を持ち、婦人問題のために生涯の献身をこの点で始めた。

共同の発起者

共同の発起者の4 人はらいてうのように上流階級家の娘で物集和子以外はみな日本女子大学の卒業生だった。発起者は平塚明子をはじめ中野初子、保持研子、木内錠子、物集和子であった。このお嬢さん達が特権の環境で育っているということは重要なのである。実際に『青鞜』の初期の投稿者の多数はそうだった。賛助員は与謝野晶子をはじめ国木田治子（独歩の奥さん）、森しげ女（鴎外の奥さん）、長谷川時雨、小金井君子（鴎外の妹）などという名の知られた女流作家になった。『青鞜』の創刊の準備の第一歩として趣意書と規約草案を書いた。例えば「本社は女子の覚醒を促し各自天賦の特性を発揮せしめ、他

日女流の天才を生まん事を目的とす」という第一条などが女性の個人としての目ざめにもとづいて「自我の解放」と「自我の確立」によって主体的に生きることを主張した。この当時はらいてうの強調することはまだ文学的目ざめだった。すなわち文学によって女性の独立と覚醒の道を開こうとするのである。らいてうの書いた趣意書と規約は封建的な「家」の掟に縛りつけられていた青鞜社の女達の苦しみにもとづいている。青鞜社員は最初から自分を社会の中心にして論じた。もっと広い社会観で論評するのは創刊の一年半後だ。だからこの立場から平塚らいてうは日本の女性解放史上、初の人権宣言といわれる「元始、女性は太陽であった」という創刊の辞を書いて『青鞜』を誕生させた。明治44年（1911)9月25日のことである。

ついに創刊！

らいてうの辞と一緒に創刊号の巻頭で与謝野晶子の「そぞろごと」と題する詩が載っている。

「山の動く日来る／かく云えども人われを信ぜじ／山は姑く眠りしのみ／その昔に於て／山は皆火に燃えて動きしものを／されどそは信ぜずともよし／人よ、ああ、唯これを信ぜよ／すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる。」

与謝野晶子は女性がごろごろと鳴っている火山になぞらえたという比喩的表現を使い女性の力を言い表している。

創刊号は予期しなかったほどの大きな反応があって社員は大いに驚いたそうだ。予期に反して文壇よりも一番強い反応は新聞に出た。この女性ばかりの雑誌は記者によって大見出しをつけてとり上げられた。青鞜社事務所には全国から手紙がどっと来て読者が増えた。大勢の女の人は『青鞜』の呼びかけを聞いて苦しんでいる生涯の闇に小さな火が見えるようになった。けれどもこの『青鞜』の初期には社員は社会との関係をあまり受け入れないで文壇同人と自分達のことだけを思っていたのでこの苦しんでいる女性の状態も自分達の問題としてあまり引き受けなかったそうだ。（こういう見方はやがて変わるようになった。）

たちまち『青鞜』はジャーナリスムによって過激的状態に見えるようになった。「こうして女性の人間としての復権を主張する『青鞜』の出発が、思想文芸の運動を通じて、良妻賢母主義と真っ向から対立することは予期していないわけではありません。それがたちまち反封建のたたかいに立ちあがらねばならぬ運命にあろうとは、まだこのときは予測するらしないことでした。」とらいてうは自伝で書いている。

『青鞜』の第一期は1911年から1912年まで続いた。この当時は特にイブセンの「人形の家」で文学が手段として使われ女性の社会的役割を明確にした時だった。1911年に東京で二回上演した「人形の家」の合評を誌上に載せることにした。実際に特集を発行した。この劇の主役であるノラは妻であり母であるより前に人間として目ざめるために夫の家を出

て自分の個人としての存在を捜しに行くというドラマである。『青鞜』にはノラの行為についていろいろな議論があった。社員の一般意見はノラに対して同情的ではなかったのに新聞などでは「和製ノラ養成所」と青鞜社が言われるようになった。青鞜社の女たちはイブセンのノラを厳しく批判した、が婦人問題への自覚がこの中に見られるのであると思う。

。　発行の第一年目には『青鞜』が荒木郁子の小説「手紙」によって最初の発禁処分を受けて社会の衝突がこの時に起きた。作品には人妻が若い愛人にあてた手紙の形式で密会の時の喜びが書いてある。封建的道徳を中心としていた当局はすぐに激しく反応した。相つぐ発禁処分の最初であり、初めて結婚の反対意見が誌上に載せられたのである。こういう風に最初から最後まで、非難を受け続けるようになった。

「新しい女」

発禁に次いで『青鞜』の女たちを巻き込んでいたスキャンダルは新聞に広くとり上げられた。このごろ（明治45年）『青鞜』の女たちは「新しい女」という名称で呼ばれていた。このスキャンダルは世間の目では「新しい女」を表したという事である。出来事は「五色の酒」と「吉原遊興」と呼ばれた。「五色の酒」というのは陽気で率直な性質を持っている紅吉という社員によって『青鞜』に書き立てた話しのせいで起きたそうである。「吉原遊興」という話しはあるメンバーの吉原という花柳街に見学に行くことに基づいたものである。この二つの話しはジャーナリズムに曲解されて世間周知の醜聞となり、らいてう達という「新しい女」のイメージに傷をつけてしまった。

1911年から1913年に新しい女という先頭に立っている『青鞜』の女たちがよく論じられたそうである。文学と社会問題の結合から脱出できないという事実をらいてう達にやがて納得させることになったはこういう前記の出来事だと言われる。その結果、女性の生活を動かすことに取り組まずに女性ばかりの雑誌を発行できないと気がついたのである。従って社会的、政治的問題についての論説を誌上に発表し、大正2 年に「新しい女其他婦人問題について」という特集を発行することでこの新しいやり方を創始することにした。これに次いで「太陽」と「中央公論」という名声のある文学的雑誌は婦人問題を命題にした特集を発表した。「中央公論」の特集にらいてうの「自分は新しい女である」という文章が刊行された。こういう宣言は「元始」と似通った発想でありながら闘争心がもっと強くなっていた。

「自分は新しい女である。少なくとも真に新しい女でありたいと日日に願ひ。日日に努めている....新しい女は「昨日」に生きない。新しい女は最早しいたげられたる旧い女の歩んだ道を黙黙として歩むに堪えない。」

これはフェミニストの見方から「新しい女」の意味を捜している文章であると思う。この当時には新しい女という名前は人によって意味は非常に違っている。公衆と新聞では新しい女はわがままで責任のない人で性的能力が過度に発達したから家族制度に被害を与えた

いという人であった。「放蕩無頼」と言われたそうである。文壇によってイブセンの定義にもとづいて新しい女は独特の英雄らしい人であった。しかし青鞜社というフェミニスト世界は新しい女の自治平等と自覚のための適法の苦闘を強調したのである。

こういう風に『青鞜』の文学的根拠から社会的政治的見方への変更は一年半しかかからなかったのである。社員の中に新しい見方に同情しない人がいたのは当然なことで退社した人もいるし入社した人もいた。新入社員の中でこの新しい見方に特に熱中した人が若い伊藤野枝である。この新しい方向へ進み始めたばかりの時『青鞜』三巻二号が発禁となり三巻四号が注意を受けた。

発禁の原因となったのは福田英子の「婦人問題の解決」と題した社会主義的文章であった。「安寧秩序を害するもの」という理由であった。福田英子の宣言は社会主義が弊害として見られた時代に非常に勇気があったものである。作家も発表した人も勇気を大胆に見せた。注意を受けたのはらいてうの『世の婦人達に』という感想である。これは良妻賢母主義と制度を大きく批判して新しい生活を持ち出したことである。

「一たび目醒めたものはもう二度と眠ることは出来ない」ことに「世の婦人達に」と題をつけた。この時で『青鞜』と同人はもはや後へ引けぬ所に来たのである。『青鞜』と政治的問題を分離させなければならないという思想を持っている人と、従来は『青鞜』が婦人問題についてもっと強い意見を主張したいという人との大きな相違があったのに、二周年の記念日に－1913年9 月－青鞜社員は今からもっと政治的な立場に立つという正式の決定をした。社則も改めて第一条の「本社は女流文学の発達を計り」が「本社は女子の覚醒を促し」になった。実際にこういった改行は大部前に起こっていたがこの時に本当に正式になったということである。

婦人問題誌への転換後

そういう思い切った処置をとってから『青鞜』にいろいろな問題について忌憚のない批評が増えた。それは特に「家」と結婚制度に見られる。1914年に両親の家を出て奥村博という若い画家と同棲生活に入ったらいてうは自分の行動でこの見方を主張したと思う。らいてうは家を出るにあたって両親に手渡した私信を『独立するに就いて両親に』という見出しで『青鞜』に公表していた。

「私は現行の結婚制度に不満足な以上、そんな制度に従い、そんな法律によって是認して貰ふやうな結婚はしたくないのです。私は夫だの妻だのといふ名だけにでもたまらない程の反感を有って居ります。」

らいてうの生活に根本的な変化が起こり、前のお嬢さんの生活から当時の貧乏と苦労がある生活に慣れなければならなかった。その後一年間『青鞜』の責任を持っている人として続いたが、精力と熱意を傾けることはいよいよ困難になっ来た。そのうち『青鞜』には急進的な思想が発表されるようになっていった。それは特に独創的な考え方をする外国人に

よってであった。例えば、らいてうに大きな影響を与えたエレン・ケイ(Ellen Key1849-1926)というスエーデンにある近代的フェミニストと、伊藤野枝の手で翻訳したエッマ・ゴルドマン(Emma Goldman 1869-1940)というアメリカに住んでいた無政府主義の主張者である。ゴルドマンは野枝の発生期にある無政府主義の意見に非常に大きな影響を与えた。らいてうの婦人解放思想と行動の根底にはケイの思想が大きく位置づけられてゆくことになった。だからケイと出会ったことは日本の婦人運動の歴史にとって意味深いことと言われている。

こういう急進的な記事のせいで青鞜社から退社していった女が多くなり、『青鞜』の経済的、編集的な問題が増えた。同時にらいてうの精神と肉体の疲労が悪くなった。大正四年一月十五日にらいてうは『青鞜』の発行権を伊藤野枝にゆずった。実際上は大部前から野枝がその責任を持っていたがこの時に形式的に引き渡すことになった。

「新しい女」の終幕

伊藤野枝は若い頃に九州の故郷での望まない結婚から逃げて上京し、直接に青鞜社員になった。若いのに異常な女で野枝の個人的人格と決断力の強さという特性をらいてうが熱心によく述べていた。『青鞜』の責任を持つようになった当時に野枝は苦しい生活をしていたがそれにもかかわらず思い切って『青鞜』に取り組んだと見られる。野枝は婦人解放がよいことだと堅く信じていたからはち切れそうな元気で『青鞜』を引き受けたそうであるが、夫や子供のことなどの個人的な問題に忙殺されるようになった。

野枝の手で出されていた短い期間の『青鞜』にはもっと急進的な議論が出て来た。特に「貞操論争」、「堕胎論争」と「婦人社会事業論」の三つの議論である。そういう論争は社会主義と無政府主義との意見を含んで当局の忌避に触れたのだった。しかし大きな抱負のもとに野枝が発行するようになった『青鞜』は一年二ヶ月あとの大正五年二月に休刊となった。全部で六巻二号になった。こんな風に大正時代に行われた大事な出来事に幕が降りた。

『青鞜』の女たちとらいてうの影響

青鞜社に参加していた女性の中には野枝を除いて日本の婦人解放運動と日本のフェミニスト活動との大切な役割を演じるようになった人達が大勢いた。野枝は関東大震災の後にあった厳しい弾圧では無政府主義の活動のせいで警察に殺されてしまった。1920年にらいてうは女性の社会的、政治上の地位の向上を目ざすための「新婦人協会」という運動を創始して1971年の死去までこういう活動を続けたのである。特に母性の権利と平和と民主主義を求める活動に参加していた

平塚らいてうは日本の女性に大切な影響を与え続けると思う。いまなお、女性の成功を無視し阻止する現代社会において、らいてうを手本とすることを忘れることは全然許され

ないと思う。

青鞜社は日本の第一番のフェミニスト運動ではないし、または一番急進的な運動ではないが、日本の近代史にある抑圧的な時期に、若い教育のある女性の自分の問題についての意識と、社会の問題についての意識の目覚めを表している。大正時代の女性解放論の特質と意識の形をつけた運動であり、日本の女性解放運動を非常に押し進めたと思われるのである。

参考文献

『原始、女性は太陽であった』（平塚らいてう自伝）全四巻　大月書店　1971－1973

『平塚らいてう』　小林登美枝　清水書院　1983

『平塚らいてう　愛と反逆の青春』　小林登美枝　大月書店　1977

『青鞜』　瀬戸内晴美　中央公論社　1984

『平塚らいてうと日本の近代』　大岡　平、丸岡秀子　岩波書店　1986

『The Seitosha: An Early Japanese Womens' Organisation1911-1916 』
in「 Papers on Japan 」 vol.6 1972 Nancy Andrew

『Flowers in salt : the beginnings of feminist consciousness in modern Japan 』 Sharon Sievers Stanford University Press 1983